

KCJ GROUP 株式会社
代表取締役社長兼 CEO

住谷栄之資

Einosuke Sumitani

実在する企業が出展する店舗で、子ども達がピザを焼いたり宅配便を届けたり……。現実社会さながらの街で、三〜五歳の子も達がたくさん仕事を本物そっくりに体験できる「キッズニア東京」。

住谷栄之資氏は、二〇〇四年から準備を始め、メキシコからライセンスを取得し、二〇〇六年、この職業・社会体験施設をオープン。現在では年間九〇万人近くの来場者を集めている。キッズニアで子ども達は何を学び、感じるのか。学校教育だけでは学べない「生きる力」を育むために、子ども達に何が必要か。外食産業を六〇歳で退職後、キッズニア導入のために東奔西走した体験談も含めて、住谷氏に語っていただいた。



生きる力を育む「子どもが主役の街」

リアルな仕事体験から「挑戦」を学ぶ子ども達

平日でも多くの人で賑わうキッザニアの街並み。



「キッザニア」の概要

キッザニアは1999年にメキシコで誕生した子どものための職業・社会体験施設。日本には世界で3番目となる「キッザニア東京」が2006年10月、東京都江東区にオープン、2009年3月には「キッザニア甲子園」が兵庫県西宮市にオープンしており、現在では世界10カ国13カ所に広がっている。キッザニアでは3～15歳の子どもを対象としており、子どもの目線に合わせ、現実社会の約3分の2のサイズの街並みに、企業がスポンサーとなった約60のパビリオンが軒を連ね、そのなかで医師、新聞記者、ピザ職人、建設スタッフ、宅配便のセールスドライバー等々、90種類以上のアクティビティを体験できる。仕事をすれば「キッズ」という専用通貨で「給料」ももらえ、キッザニアの街で使うことも、次の来場時まで銀行に預けておくこともできるなど、リアルな経済活動が体験できる。

——「キッザニア」で多種多様な仕事を体験している子ども達の様子を拝見して、楽しそうな笑顔と真剣な眼差しが印象的でした。

住谷 ここでは実物の三分の二サイズのリアルな街で、九〇種類以上のアクティビティ（職業体験やサービスの提供とその利用）を体験できます。街並み、店舗、ユニフォームなど、どの国のキッザニア

アよりも、リアルさにこだわって、なるべく本物に近い職業体験をご用意しています。

幼稚園児から中学生まで、子ども達は本当に真剣に職業体験に向き合っていますよ。ふざけている子は見かけません。勉強よりも一生懸命にやっているのではないのでしょうか。学校で教わるものではないかもしれませんが、子どもながらに「仕事」や「働くということ」に特別な思いがあるのでしょうか。日本ならではの勤勉さだと思います。

——キッザニアは世界各地にありますますが、楽しみ方などはそれぞれに違うのでしょうか。

住谷 キッザニアには、その国の文化や国民性が出ていますね。

たとえば、どの国でも一番初めに、キッザニアの中で使えるお金「キッズ」を一定額渡されます。

そうすると、メキシコなどラテン系の国では、買い物したり、サービスを受けたりしてキッズをパッと使い切り、その後で仕事をする。ところが、日本ではまずキッズを銀行に預けて一生懸命に仕事をします。仕事をするとキッズで給料がもらえますから、それをまた銀行に預けて仕事をする。中には銀行に預けたくないといって持ち帰る子もいますが（笑）。買い物は最後です。

また、日本では、パビリオンの作りや仕事の材料にも特にこだわっています。パビリオンのスポンサー企業がノウハウを提供してくれるのですが、一切出し惜しみがありません。むしろスポンサーから「なるべく本物を」と言われます。たとえば、ハンバーガーショップでは、材料も作り方も実際の店舗と同じです。本物のユニフォームを着て、本物の材料でハンバーガーを作る。最後に給料

をもらって、出来上がったものを「お店と同じだ」と味わって食べる。こうしたリアルな職業体験を通じて、子ども達は、仲間と一緒に働くということ、お金を稼ぐということ、そして仕事をやり終えたときの達成感といったものを感じ取ってくれるのだと思います。

——仕事観を形成するきっかけになり、教育効果もある。

住谷 そう考えています。修学旅行で初めて来た中学生などに「仕事」には、どんなイメージがありますか？とアンケートすると、「給料」「疲れる」「残業」「クビ」といった普段周囲から聞こえてくる現実的な言葉がキーワードとして返ってきます。ところが、同じ子に、体験後に再度たずねると、がらりと変わるんです。「挑戦」「責任感」「笑顔」「未来」「仲間」「生きる」などポジティブで広がりのある回答が圧倒的に多くなる。

私なりの解釈では、子ども達は

右／キッザニアの専用通貨「キッズ」。下／パン作りに挑戦。真剣な眼差しでパン生地感触を確かめる子ども達。



「自ら考えて行動する力」 悔しいから、リピーターになる

働く大人の姿をみて「働くことは大変だ」と感じています。そうした面があるのは事実ですが、それは仕事の一面しか見ていないわけです。しかし、ここで仕事を疑似体験してみると「仕事は楽しい」

「面白い」といったように仕事に対する見方が変わっていきます。見て、聞いて、体で感じ取って、子ども達に楽しく遊びながら学んでももらえたら、それにまさる喜びはありません。

——大勢の子ども達が「遊び」と「学び」を両立させる場として、どのようなことに気を配っているのでしょうか。

住谷 子ども達の安全、保護者の方の安心を最優先しつつ、なるべく本物に近い現実社会を体験し、

自ら考えて行動してもらえよう環境を整えています。

施設内には最新のセキュリティシステムを完備し、保護者が子どもを見守れるようにもしています。その一方で、アクティビティの場所には大人は入れないようにするなど、過保護・過干渉とならず、子ども達の自主性がある程度尊重するようにしています。

パビリオンでは専門にトレーニングされた「スーパーバイザー」がお手伝いします。といつても、スーパーバイザーは上司や先生ではありません。いわば「職場の先輩」といった位置づけです。子ども達が「大人の役」になりきり、自発的に働ける環境をつくるようにサポートします。必要な説明

はしますが、「手取り足取り」の指導や仕事の出来の評価はしません。

もちろん、中にはうまくいかない子もいますが、それでも子ども達は一生懸命周りに付いていこうとするし、子どもなりに出来たかどうかは分かれます。

キッザニアは、ありがたいことにリピーターの子が非常に多い。聞くと「悔しいからまた来た」と言います。「前に来たとき、隣の子はちゃんと仕事が出来たのに、自分はできなかった。だから、で

きるようになりたい」と。そして、前と同じ仕事を選びます。

——真剣に取り組むからこそ失敗すると悔しい、悔しいから克服してやろう、という気持ちになる。

住谷 そうです。大事なことは、自ら考えて行動すること、チャレンジすることです。自分の目標を持ち、失敗してもあきらめず、チャレンジする力。これこそが「生きる力」だと思います。子ども頃から「生きる力」を養っていけば、どんな分野でもきつと活躍できると信じています。

人材教育への思いとキッザニアとの出会い

——住谷社長はもともと外食産業に長く身を置いていらつしやつた、とうかがいました。

住谷 大学卒業後、最初に観光関連の会社で働き、入社五年目に大先輩から誘われて、共同経営パートナーとして起業しました。そして、一九七二年に米国大手ファーストフードチェーンのフランチャイジーになったのを機に外食事業に本格的に参入したんです。その後、カフェ、レストラン

など、数社のアメリカ系外食産業とライセンス契約を結んで、日本国内に導入しました。最後は社長を三年間務めて、二〇〇三年に六〇歳で一度引退しました。

しかし、私の中に、三〇年以上たずさわった外食産業の経験を通じて、入社以前の人材教育をもっと踏み込んでやらないといけない、という思いが残っていました。——学校教育を補うものが必要だということですか。



すみに・えいのすけ●1943年和歌山県生まれ。KCJ GROUP 株式会社 代表取締役社長 兼 CEO。慶應義塾大学商学部卒業。藤田観光株式会社に入社して5年目に起業。株式会社日本ダブリュー・ディー・アイ（現・株式会社WDI）に入社。1972年、ケンタッキーフライドチキンのフランチャイジーとして東京・六本木店をオープン。以後、ハードロックカフェ、トニーローマ、スパゴなどのライセンスを取得して外食事業を幅広く展開する。2000年に株式会社WDI社長に就任。2003年、同社を退職。2004年、メキシコの「キッツニア」を視察に訪れ、日本への誘致を決意。同年株式会社キッツニアシティージャパン（現・KCJ GROUP 株式会社）を設立し、約2年の準備期間を経て、2006年10月に「キッツニア東京」をオープンした。2009年3月には「キッツニア甲子園」もオープン。

「日本では開業率の低い状況が つづき、起業家も育ちづらいと指摘されます。住谷社長はどうやって道を切り開いていったのですか。」

「日本では開業率の低い状況が つづき、起業家も育ちづらいと指摘されます。住谷社長はどうやって道を切り開いていったのですか。」

住谷 ええ。学校教育を終えて入社してきた人達には、まずはレストランのメニューを適切につくったり、手順通りにサービスしたりできるように教えなければなりません。そこまでは誰もが有る程度型通りのスキルを身に付けられます。しかし、それ以上のことを求めるとき、会社に入ってから教育では遅いのです。

たといえば、マネジャー研修で、管理職の心構えや指導の仕方を繰り返し説いても、リーダーとしてモノになる人は限られます。結局、会社で教えられることがその人の本質を決めるのです。社会に出る前に吸収したこと、養ってきたことがより大事なのです。——人としての土台作りが重要だということですね。

住谷 外食産業で働いていた三〇年あまり、ずっとそう思い続けてきました。いろいろな感性を養うことが大事だと。しかし日本の学校教育は知識に偏り、地域社会で人と人との触れ合いから学ぶ機会もなくなっている。子ども達の五感を養う場所が見当たらない……。そんな思いを残しながら、外食の仕事を引き退きました。退職後しばらくして、アメリカの友人から「子ども向けに職業体験を提供するテーマパークがある」と聞いてメキシコへ飛んで行きました。キッツニアで生き生きと働く子ども達を見てみると、「エデュケーション（学び）」と「エンターテインメント（楽しさ）」を両立させる「エデュテインメント」というキッツニアのコンセプトに合点がきました。「日本にこそ必要だ」と思い、事業としても面白そうだと直感したのです。——それまでご経験された外食とキッツニアでは業態が違います。日本への導入に「ご苦労はなかつたでしょうか。」

住谷 たしかに二つの業態は違いますが、私から見れば、ビジネスの核心は九九%共通です。というのも、外食産業でフランチャイズやライセンス取得のビジネスを何度も経験していたので、その延長線上でキッツニアの国内導入も違和感なく取り組むことができました。また、施設にお客様や子ども達を迎えるスタイルも似ているし、その基本となるホスピタリティの考え方は同じです。むしろ苦労したのは、事業化に走り出したころです。どうやって施設を立ち上げる資金を工面するか、スポンサーになってくれる企業を集めるか。キッツニアの事業計画書を持って銀行に融資を頼みに行っても、初めは一銭も出ません。「社長」の肩書が取れ、一人になった私には担保なしでは融資できないと。スポンサー企業を探す過程でも「本家メキシコ」に難色を示されました。欧米発祥のビジネスであればスムーズにいくのですが。



けです。「日本の教育は勉強一辺倒で、『働くこと』への意識づけが薄い。子どものころから『仕事』や『社会』と向き合う仕組みが必要だ」と思いを語り、「エデュテインメント」のコンセプトを伝えると、徐々に協力してもらえようになりました。二年ほどの準備を経てキッザニア東京を立ち上げることができたのです。

——住谷社長の思いに多くの方々が賛同されたということですね。

住谷 振り返ると、キッザニアのコンセプトを否定する人はいなかった。今の若い世代はどこか物足りない、子どもの頃に何かが必要だと、私だけでなく、皆さんも問題意識があったのだと思います。

キッザニア卒業生が未来の社会を支える日

——子ども達の感性を育む場所として、かつては地域社会に子ども達の居場所があり、世代間の交流やつながりもありましたが、現在では希薄になりました。

住谷 子ども達は、学校、塾、家庭といった点と点を移動する毎日

です。それでは新しいつながりが生まれません。

かつて地域社会が担ってきた役割を補えるものではありませんが、キッザニアという場所で生まれる「人とのつながり」も子ども達には新鮮だと思っています。住

むところや年齢が違う初めて出会った子どもどうしが、親から離れて同じ仕事に取り組む。最初は距離があっても、一緒に「お菓子工場」でキャンディーをつくったり、「テレビ局」で番組づくり挑戦したり、いろいろな力を合わせて働くうちに仲良くなっていきます。そのまま友達になって他のアクティビティを一緒にしたり、メール交換して、また別の日に連れ立って来たり……。考えてみると、今の子ども達にとって、そうした新しいつながりが生まれる場所は少ない気がするのです。

——キッザニア世代の上の高校生、大学生に対してはどのようなことが考えられますか。

住谷 高校生を対象に、今年六月から「語ろう塾」と題するプログラムを開講しています。自分の将来を前向きに考える高校生を一人程度集めて、社会の課題について考えたり調べたりする試みです。

また、大学生に関して言うと、スパーバイザーの三分の一は大学生のアルバイトです。私は社内でも「自分で考えろ」と言い続けている、マニュアルは最小限のも

のにとどめています。その分大変ですが、彼らには、キッザニアで働く経験から学んでほしい。臨機応変の判断、仕事に対する向き合い方、スタッフどうしのチームビルディングなどを学び成長してもらいたいのです。また、昨年から、大学生のアルバイトを対象に、キッザニア独自の就職支援プログラムを開講し、スキルアップを応援しています。業界や企業の研究、実践英語やビジネスマナーなどを教えたりする内容です。

——幼児から大学生まで、仕事や社会への意識づけを一貫して行っていることになりそうですね。

住谷 キッザニアがオープンして七年余りです。ここで職業体験をして社会人になった人はまだまだ少ない。今後、どのような人材がキッザニアの卒業生から生まれるか。未来に貢献する若い世代を多く送り出すことが、私自身の大きな夢です。

——本日は、希望が膨らむお話を伺いできました。どうもありがとうございました。

(聞き手/情報サービス局長・丹治芳樹)